

「来週は、卒業式。全員で感動の式を！」

生徒指導通心
第36号

縁(えん)

妻ヶ丘中生徒指導部
令和5年3月10日発行



県立一般受検が終わり、3年生はいよいよ卒業の準備へ向かいます。卒業式の練習も始まりましたね。3年間の締めくくりとして「3年生らしく」締めくくってほしいと思います。

ところで、皆さんは「足を洗う」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。これは、「悪いことから身を引く」という意味があります。それでは、なぜこのような言い回しになったのでしょうか？この言葉は、仏教から出た言葉だそうです。裸足で修行に出た修行僧は、寺に帰ると、俗世間の煩惱を洗い清めてから仏業に入りました。このことから、「悪事から抜け出す」という意味に転じたと言われていました。

さて、以下の記事は、私が読んだ新聞記事からの抜粋になります。毎年、多くの人が就職試験を受けに来る会社の社長さんのお話です。その社長さんは、必ず自ら面接をするのだそうです。

ある年のこと、面接に来た学生に向かって社長は聞きました。「君はお母さんの足を洗ったことがあるかね？」その学生は正直に、「洗ったことはありません」と答えました。それからいろいろと質問したあとに、社長さんは見どころがあると思ったので、「君、〇月〇日までにお母さんの足を洗ってからも一度この会社に来てくれ」と言ったそうです。

学生は実家に帰ったとき、お母さんの足を洗おうと思いました。ところが、いざ母親の足を目の当たりにすると目頭が熱くなり、とうとうその足にしがみついて泣き出してしまったそうです。

学生は約束の日に会社に行き、社長さんにそのことを話しました。「私の父は戦争で亡くなりました。母は女手一つで私を大学まで出してくれました。『こんなに足をヒビだらけにして、どんなにか苦勞したんだろう』と思うと、母の苦勞が身にしみるようによく分かりました。私は故郷で母と一緒に暮らしていきたいと思います。ありがとうございました」

(みやざき中央新聞2017年2月27日号より)

この社長さんの話を読んで、「足を洗う」という言葉は、自分の足ではなく、父や母などの「足を洗う」ことではないかと考えさせられました。自分を育てるために、一生懸命働いてくれた親への感謝。その親の「足を洗う」ことで、その苦勞が身にしみて分かり、感謝の気持ちへとつながるのではないかと思いました。まさに、3年生にとっては節目の時。これまでの感謝を伝える時ですね。

★最後の授業★

熊本県の天草東高校をはじめ6校の校長先生を務め、九州ルーテル学院大学客員教授も務めた大畑誠也氏のお話を紹介します。

私が考える教育の究極の目的は、「親に感謝、親を大切にすること」です。高校生の多くは、今まで自分一人の力で生きてきたように思っています。親が苦勞して育ててくれたことを知りません。これは天草東高時代から継続して行ったことですが、このことを教えるのに一番ふさわしい機会として、私は卒業式の日を選びました。式の後、3年生と保護者を全員視聴覚室に集めて、私が最後の授業をするんです。そのためにはまず形から整えなくちゃいかんということで、後ろに立っている保護者を生徒の席に座らせ、生徒をその横に正座させる。そして全員に目をつぶらせてからこう話を切り出します。

「今まで、お父さん、お母さんにいろんなことをしてもらったり、心配をかけたりしただろう。それを思い出してみろ。交通事故に遭って入院した者もいれば、親子喧嘩をしたり、こんな飯は食えんとお母さんの弁当に文句を言った者もおる…」そういう話をしているうちに涙を流す者が出てきます。

「おまえたちを高校へ行かせるために、ご両親は一所懸命働いて、その金ばたくさん使いなさったぞ。そういうことを考えたことがあったか。学校の先生にお世話になりましたと言う前に、まず親に感謝しろ。そして、心の底から親に迷惑を掛けた、苦勞を掛けたと思う者は今、お父さんお母さんが隣におられるから、その手は握ってみろ」と言うわけです。すると一人、二人と繋いでいって、最後には全員が手を繋ぐ。私はそれを確認した上で、こう声を張り上げます。

「その手がねえ！18年間おまえたちを育ててきた手だ。分かるか。……親の手をね、これまで握ったことがあったか？おまえたちが生まれた頃は、柔らかい手をしておられた。今、ゴツゴツとした手をしておられるのは、おまえたちを育てるために大変な苦勞をしてこられたからたい。それを忘れるな」その上でさらに、「18年間振り返って、親に本当にすまんかったから感謝すると思う者は、今一度強く手を握れ」と言うと、あちこちから嗚咽が聞こえてくる。私は「よし、目を開けろ。分かったや？私が教えたかったのはここたい。親に感謝、親を大切にする授業、終わり」と言って部屋を出ていく。振り返ると親と子が抱き合っ



忘れていけないのは、その毎日を支えてくれた人がいるということです。その支えに、本当の意味で気づくのはずっと先の「同じ立場に立ったとき」かもしれませんが、感謝することを想像することはできますね。不器用でも、照れくさくても、ケンカばかりしていても、「ありがとう」の気持ちは伝えましょうね。特に、3年生は伝えるチャンス…かもしれません…。

明日は、東日本大震災の日です。
今あることへの感謝を忘れずに…

※裏面には、震災当時の階上(はしかみ)中学校の卒業式における「答辞」を載せています。

卒業生代表の言葉

本日は未曾有(みぞう)の大震災の傷も癒(い)えないさなか、私たちのために卒業式を挙行していただき、ありがとうございます。

ちょうど十日前の三月十二日。春を思わせる暖かな日でした。

私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通い慣れたこの学舎(まなびや)を、五十七名揃って巣立つはずでした。

前日の十一日。一足早く渡された思いでのたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳(は)せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らずに...

階上(はしかみ)中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。

時計の針は十四時四十六分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。

命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。

私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。先生方、親身のご指導、ありがとうございました。先生方が、いかに私たちを思ってくださっていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。

お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩いていく姿を見守っててください。必ず、よき社会人になります。

私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。

最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。

平成二十三年三月二十二日
第六十四回卒業生代表